選択することはできるが，大学進学を希望している生徒は受験科目を「選択」せざるをえないのであり，筆者の言う自分の適性に応じた「選択」とはかけはなれているのが実態である。とすれば，筆者の提案する選択制外国語集中コースは，渡部氏の指摘のごとく，「選択」の意味を失う危険がある。この点を筆者はどう考えているのだろうか。

もう一つ疑問を呈すれば，筆者は比較文化を推進する場として中高校の外国語の授業を想定しているが，社会科，とりわけ現代社会でも行なうべきでろう。外国語の授業のなかで，比較文化を取り上げることは，大切なことであるが，そもそも文化を考えるために創設された現代社会という科目を比較文化の場とすることも考えなければならないと思われる。さらに言えば，科目の「縄張り意識」といったものをなくし，外国語と社会の両方の科目で適時，比較文化を行なうべきではなかろうか。

以上，本書の主張について若干の疑問点を提示した。が，前述のごとく，本書は単なる比較文化の書ではなく，比較文化を行なうことによって，自文化の見直しを行い，未来に役立てようとする，意欲的な書である。問題点は私が指摘した以外にも多々あろうが，比較文化研究に携わる者は一度は読むべき価値がある書と思われる。

＊私が本書の書評を書こうと思い立ったのは，国際コミュニケーション英語研究所（Institute for Research in International Communicative English 略称 IRICE）（1994年６月）における松本氏の講演を拝聴したことを契機とする。熱演の後に書評の件を快く承諾してくれた松本氏に感謝したい。また，書評を執筆するに当り，IRICE Newletter No. 16（1994年８月）に掲載された湯沢伸夫氏による講演の要約を参考にした。

（Ｂ６版　261頁　研究社　1994.）

崔吉城著・真鍋祐子訳
『恨の人類学』

大山　孝正※

本書は，韓国における巫俗信仰（シャーマニズム）を中心とした民間信仰の調査・研究に永く取り組んできた，崔吉城氏による『韓国人の恨』（禮典社，1991年）の全訳である。訳者の真鍋氏も韓国の巫俗信仰についての現地調査を重ねてきた日本の若手研究者であり，本書の日本語訳は，両氏の研究上の深い交流の中から生み出されたものである。

本書のタイトルとなっている「恨（ハン）」とは，韓国人の心性，あるいは韓国文化の本質を知る上での重要なキーワードとして，しばしば語られる言葉であるが，日本の植民地支配など過去の日韓関係に関して，両国間の歴史認識のずれが容易に解消されないことについて，「日本人に比べて韓国人には恨の感情が根強い」といった解説がなされることもある。そうした解説の当否は別としても，韓国には『恨五百年（ハン・オベンニョン）』と呼ばれる有名な民謡があり，それが，韓国人の「恨」がいかに根深く永く生き続ける心情であるかを表現するものとして象徴的に語られもする。このように，韓国語の「恨」という言葉の持つ重みは，評者のような日本人には計り知れないという印象さえある。

そうした韓国人および韓国文化の「恨」をめぐる問題について，巫俗信仰を中心に調査・研究を重ねてきた著者が，社会人類学者としての立場から取り組んだのが本書である。第１章の「恨の人類学」の中で著者は，かつて韓国文学界において高銀（1933～）が示した「弱者や女性にみられる…永久的な絶望が生んだ諦念と悲哀の情緒」であり，「韓国固有の情緒」であるとの概念規定をもとに，「恨」の問題を取り扱うことを表明している。しかし，人が

※筑波大学大学院歴史・人類学研究科

他人を恨んだり，人生の不幸を嘆いたりする感情はどこの社会にもある。にもかかわらず，韓国社会でこれほどまでに「恨」が語られ，韓国文化が「恨の文化」と言われるのはなぜであろうか。

訳者の真鍋氏は，「〈恨〉とは決して“怨”ではない，日本語に言う“うらみ”などでは決してない，すなわち両者は似て非なる概念」であるとし，「〈恨〉は自分自身の内部に沈澱した情念であり，具体的な復讐の対象を持たない」ものであると解説している。そして，「“怨”や“うらみ”は何も生み出すことなく，憎悪と復讐を増幅させるばかりであるのに対し，〈恨〉の巫俗は人間をして千年王国を夢見させ，逆に新たな再生の力を与えるダイナミックな装置」であるとも述べている（訳者あとがき）。この解説にしたがうならば，本書の主題である韓国の「恨文化」とは，韓国人が日常生活に感じる矛盾や葛藤の蓄積である「恨」を解決するための装置としての，巫俗などの信仰・儀礼とその原理を指すとも受け止められる。その意味では，『韓国民間信仰の研究』（啓明大学校出版部，1989年）や『韓国の祖先崇拝』（重松真由美訳，御茶の水書房，1992年）などの著作を通して，韓国の民間信仰や宗教現象に取り組んできた著者が，本書では「恨」というキーワードによって，その基底に流れる心情の部分について浮き彫りにしようと試みたものといえる。

一方で，本書の内容は，韓国の巫俗信仰などの分析を中心にしながらも，女性や社会的弱者に対する差別，自殺，非業の死を遂げた英雄の神格化など，著者の関心は極めて広範囲にわたっている。それは，韓国では「恨」が人の死後も生き続けると考えるために，故人の「恨」を解くことが大きな関心事となっているためである。本書では，こうした「恨」を理解するための様々な問題について，日本や中国などの例や研究業績も引きつつ，多角的に論じられている。本書の章立てを示すと以下のようになる。

第１章　恨の人類学
第２章　泣きの人類学
第３章　女性と恨
第４章　母の恨
第５章　巫俗の恨と踊り
第６章　解冤のメカニズム
第７章　巫俗を通して見た死
第８章　死をめぐる自己分析
第９章　日本と韓国の自殺を通して見た恨の構造
第10章　自殺と文学
第11章　〈主なき祖先〉の恨
第12章　死の処理
第13章　差別と恨
第14章　恨の宗教化
第15章　韓国巫俗の死生観

ここで各章の内容を詳細に論じる余裕はないが，やり場のない「恨」を解決する装置としての韓国の宗教現象を考える上で興味深い分析がなされている箇所がいくつかあるので，簡単に触れておきたい。

まず，第２章では，「哭」と呼ばれる儒教の喪葬礼における儀礼的な泣きや，巫俗儀礼におけるムダン（巫堂）の泣きを分析している。泣きをめぐる人類学的研究は最近徐々に盛んになりつつあるが，ここで著者が試みているのは，儀礼における感情の伝達手段としての泣きの分析である。ある一定の形式を伴う儒教儀礼の泣きに対して，巫俗の泣きは種類が多く，変換も比較的自由に行われるという。そして，「泣きは言語的意味伝達の次元を越え互いの感情の溶け合うかのごとき雰囲気を醸し出す」もので，「泣きの機能は，悲しみの感情や恐怖を解消させて宗教的に昇華し，やがて儀礼的機能にまで高まっていく」と述べている。このように，著者は儀礼的な泣きを，悲しみや恐怖を解消する機能を持つものと位

置づけているが，それが韓国人に多いとされる「恨」とどう関係するのかといった問題にまで踏み込まず，今後の研究成果への期待を表明するに留めている。

第３章では，韓国女性に特有の「恨」が，夫の死や生活苦の中で蓄積されながらも，それと葛藤しつつ耐える中で形成される感情であることが述べられ，そうした「恨」を間接的に解消しようとするところに，巫俗信仰が効果的に機能してきたことが示される。こうした女性と「恨」をめぐる問題は，第13章で全羅南道の巫堂であるタンゴルを通して論じられる差別と「恨」の問題とも関連してくる。

本書で論じられる「恨」は，これを生きている間よりも，むしろ死んだ後に強く感じられるものとしてとらえている点に特徴があるように思われる。第７章では，こうした死と「恨」の問題が巫俗に見られる死生観に引きつけて端的に述べられ，第８章では，著者の個人的な経験から，死の識化過程や，巫俗信仰およびキリスト教が著者の人生に大きな影響を与えたことなどが述べられている。死者の「恨」を感じるのは生きている他人であるが，一個人の死が様々な社会的評価を受け，ときにイデオロギー化されることもある。そうした死と「恨」をめぐる重要な問題として，第９章では自殺の問題に触れており，日本との比較も試みられている。それによると，儒教の影響の強い韓国では女性の貞操に関わる自殺が顕著であり，道連れ自殺についても韓国では孝道に関連した話が多い。また，忠君愛国的な自決については，日本では組織的な上下関係の中で起こるのに対し，韓国では道義的責任や名分といったことが重要になるなどの違いがみられるという。一方，第10章では，日本における作家の自殺を通して，日本社会の病理現象にも言及している。

死者の「恨」を宗教現象の中でとらえるときに，第11章で述べられる〈主なき祖先〉の祭祀の問題は，死霊観との関連で重要な示唆を与えてくれる。〈主なき祖先〉とは，祭祀の担い手となるべき子孫のいない死者にのことであり，儒教祭祀の理念から外れた存在である。それは不幸な存在とされ，祟りを起こすとして恐れられる。そうした不幸な死者の「恨」を解くために巫俗の儀礼が相互補完的な関係にあることが分かる。第12章では全羅南道の事例として，死者の「恨」を解くために巫俗によって行われる「三虞脱喪クッ」の内容が詳細に報告されている。

第14章では，死者の「恨」がイデオロギー化され，ついには宗教化された例として，民間で広く信仰を進める崔瑩将軍が取り上げられている。崔瑩は高麗王朝に忠誠を尽くし，反逆者の李成桂のために非業の死を遂げた英雄であるが，李朝時代には逆賊として位置づけられたために，その怨霊が民間信仰で重要な位置を占めるに至った。この崔瑩将軍の神格化の過程を，著者はターナー（V. Turner）が儀礼の過程や社会的諸現象へのアプローチとして示した社会劇（social drama）として把握することを試みている。第１章において，著者は「恨」が「韓国社会が時間的な流れの中で蓄積してきたものである」と見る故に，この社会劇分析を韓国の「恨」を動態的に把握するための最も有効な方法として提示しているが，この崔瑩将軍の問題への言及は，本書において非常に重要な位置を占める部分であるといえる。また，日本の菅原道真の死および神格化過程との比較も試みており，これは柳田国男以来の日本民俗学における御霊信仰をめぐる議論にも一石を投じるものといえよう。

このように，本書の内容は「恨」というキーワードを軸としながらも，その関心は極めて多岐にわたっているが，本書のテーマである韓国社会の「恨」の解明ということが，各章で扱われた個々の問題を通して，必ずしも明確かつ有効な議論として展開されているとは言い切れない部分もある。しかし，多くの未

開拓な領域についても，著者かつ自身の研究を土台として積極的に関わろうとし，そのための議論の契機となる材料を少なからず提供していることは，韓国の民間信仰や宗教現象をめぐる今後の研究において大きな意義を持つものと考える。何よりも，本書の中で著者自身を調査・研究に向かわせた動機や，その過程で抱かれた様々な思いが伝えられていることは，調査・研究が常に何らかの思想性と無縁でないということを，研究者一人一人に自覚させるに十分な重みを持つものである。

（A 5 版467頁　平河出版社　1994）

彙　報

◇比較民俗研究会報告

・第35回　1994. 5. 11
古田博司
「儒礼教化以前の朝鮮葬祭法」

・第36回　1994. 5. 26
稲村　務
「比較民俗学と社会人類学における“比較”概念点描」

・第37回　1994. 9. 30
真鍋祐子
「中国延辺朝鮮族自治州見聞録」（スライド使用）

◇ハーバード大学客員研究員

・1994. 7. 14～1995. 8
古家信平はハーバード大学燕京研究所にて「中国民間道教と民俗」をテーマに客員研究員として一年間の滞在，研究に出発。

◇日本学術振興会論博事業研究指導者派遣

・1994. 7. 1.～ 7. 10
・平山和彦は論博研究者白庚勝氏の研究指導のため中国社会科学院民族文学研究所にて現地指導。
・北京師範大学中文系にて「日本の民俗学史について」，北京大学社会学・人類学研究所にて「伝承論」について講演。
・中央民族大学中文系，中央民族文化宮を訪問。民族学に関する座談会など学術交流を行う。

◇西南中国民俗調査

・1994. 9. 10～10. 5
・文部省科学研究費国際学術研究「漢族と周辺諸民族における民俗宗教の比較研究」（代表：佐野賢治）の第一次調査として雲南省麗江納西族自治県の東巴文化及び村落調査に出発。第二次調査は1995年三月に東巴儀礼を中心に実施予定。
・中国側は何曜華雲南社会科学院長を顧問に，郭大烈（雲南社会科学院），李子賢（雲南大学），陶立璠（中央民族大学），周星（北京大学），白庚勝，巴莫曲布嫫（中国社会科学院），巴莫阿依（中央民族大学）が調査団員として参加。
・李錫（麗江博物館）翌煜華（東巴文化研究所）が現地調査協力者として参加。